

フィールドスタディ（地域力再生とガバナンス）」の参加報告レポート

公共経営大学院 中原真里

(1) プログラムの実施スケジュール

日程		第1日目	第2日目	第3日目	第4日目	第5日目	第6日目
		8/4	8/5	8/6	8/7	8/8	8/9
活動内容	午前	・現地集合	・湯船地区役員との意見交換会	・地域おこし協力隊員との意見交換会	・中間発表資料作成	・最終発表資料作成	・和束町役場での政策提言会
	午後	・開講式 ・町内視察	・湯船森林公園現地視察	・班内協議	・中間発表 ・班内協議	・プレ発表 ・資料修正	・京都府庁での政策提言内容報告
	夜	・懇親会	・農家民宿にて宿泊	・班内協議	・班内協議	・最終発表資料作成	・懇親会

(2) プログラムの内容要約・取り組んだ課題

私が参加した「フィールドスタディ（地域力再生とガバナンス）」という授業は、京都府南部にある「和束町」の課題について向き合う、6日間の夏季集中講座です。2017年は9名の学生が参加しました。

和束町は、他の多くの山間の地域がそうであるように、人口減少が進んでいる、人口4000人余りの小さな町です。しかし、町内には宇治茶の生産を支える日本有数のお茶畑が広がっており、近年は「日本で最も美しい村」連合に名を連ねたこと等から、「茶源郷」と言われるその美しい風景を一目見ようと観光客が増加しているところです。一方、リピーターの確保等、今後ますますの観光誘客が新たな課題となっています。

また、和束町内には、茶畑エリアとは別に、かつて林業で栄えた湯船という地区があります。こちらの地区は高齢化率が50%を超えている、いわゆる限界集落です。湯船地区の活性化は、町全体の将来にも直結する重大課題として認識されており、当該地区にある唯一の集客施設である湯船森林公園を活用して、持続可能な地域経営をしていくことがもう一つの課題となっています。

そこで、A班は「交流人口の増加」について、B班は、「湯船森林公園のさらなる活性化」について検討を行うこととなりました。私は、B班の一員として、政策提言を行いました。

(3) 参加して得た成果、感想

町の関係者の方々や住民の皆様が、日々考えておられても解決が難しい問題について、6日間の滞在の中で提案できることは限られているのではと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、実際に、現場を見て住民の皆様のご意見を伺う中で、人材や財政状況、地域特性等がわかってくると、事前に準備していた案の多くは却下せざるを得なくなりました。

しかし、班のメンバーと濃密な時間を過ごす中で、メンバーそれぞれに異なる視点や考え方、知見があることを知り、それらを共有できると、不思議と、このメンバーだからこそ、気づき、提案できる解決策があるのではないかという感覚が生まれてきました。一人では決して出てこなかったアイデアが、仲間との協議の中で生まれるこの体験は、今後仕事をしていく上でも忘れてはならない貴重な経験です。年齢も職歴も異なるメンバーが「学生」というフラットな関係の中で協議できたからこそであり、チーム運営のあり方や良いリーダーシップの取り方について改めて考えさせられました。

後半の日程は、課題とされていることの根源には何があるのか、外からしか見えない重要なポイントはないか、大学院の授業で得た知識に加え、それぞれの学生のバックグラウンドから得た経験等の全てを絞り出すことで何か提案できないか、と考え抜きました。「考え抜く」とは言葉では簡単ですが、非常に頭と体力を使います。最終日には全員、満身創痍状態になっていたのも、今となっては良い思い出です。

終わってみれば、6日間という期間はあっという間で、個人的には不完全燃焼な部分も少なからずありました。政策提案後も、なぜ納得がいくところまで辿り着けなかったのか、より良い政策はないかをメンバー間で話し合う等、未だに班内では議論が続いているのも面白いところです。

(4) プログラムのおすすめポイント等

フィールドスタディの良いところは大きく2点あります。

1点目は、机上ではわからない、住民の気質や歴史的背景、表情等から感じる、奥深い部分に触れることの大切さに気づかせてくれるところです。これは、これから「公共」に関係するキャリアを積み重ねようとする全ての方になくしてはならない経験だと、強く感じます。

同じ地域が二つとないように、地域の課題も少しずつ異なります。先進事例をそのまま当てはめるのではうまくいきませんし、地域の方の顔を見ていない「よそ者施策」ではその土地の文化にはなっていないと思います。一つの施策が、そこに暮らす住民、強いては未来の住民の笑顔に届くまでを、ちゃんと一連のものとして考えるということの大切さを、このプログラムからは学ぶことができます。

2点目は、短期間で集中してチームで取り組むという作業を通して、様々な発見をもたらしてくれるところです。私の班は年齢も知識もバラバラな5人が集まったため、各メンバーのそれぞれ得意・不得意がはっきりしていたように思います。私の場合、疲れが出てくる中での閉塞感を打破するムードメイキングなど、自分では解決できないことを他のメンバーから学ぶことができました。社会人経験の有無に関わらず、良いチーム（プロジェクト）運営とはどういうものかを改めて考えることができる場にもなるはずです。

本大学院にご入学された一人でも多くの方が、一つでも多くのフィールドスタディを履修されることを、私は心からおすすめしたいと思います。